

槐かい

平成30年2月号

岡井省二創刊

平成三十年二月一日発行 第二十八巻第二号 通巻第三二〇号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



ハードル

高橋将夫

消えないと氷つてしまふ冬の虹
冬支度心の準備から始む
道順を変へたることも冬支度
ハードルをくぐつてしまふ馳かな

熱爛や期待するから腹も立つ
天辺に立てば飛ばされ冬帽子
何事も浅漬ほどがよかりけり
竜宮を守る原潜神の留守
御火焚のテロも鎮める炎かな
感謝する余生勤労感謝の日
年の市はや来年が垣間見ゆ



『俳句界』十二月号より

槐安集

水野恒彦

海峡より夜が離れゆく憂国忌
飯の世の浮いては沈むかいつぶり
夜は昼の水引草に夢結ぶ
牡丹焚く蒼き炎の火の奥に
冬の夜の時を吸ひ込む太柱

加藤みき

神鈴のぼこぼこじやらん神還る
今年またシリウスに会ふうれしさよ
立冬の家鴨の独り遊びかな
榊の葉の青青とあり年用意
あらたまの年の水なり捧げもつ

中島陽華

白装束の河童追ひ紅葉山
節高の指で腕を杜鵑草
左曲りの神田つ子走り蕎麦
三味鳴るや梟の目は虹彩に
つまみなをつまむ指もて鬼やんま

竹内悦子

朝寒の門扉にはさむ回覧板
けふの空青すぎて十一月三日
霜月の狐うどんに箸二つ
象の絵は耳と鼻だけ冬に入る
狐火や仰山人の通る影



雨村敏子

北斎の大濤かぶり熊楠忌
木簡の墨の鈍色神わたし
烏賊を干す影も干されてゐたりけり
象の耳はたはた動き師走なり
白葉牡丹の渦ほころぶや孔雀なく

本多俊子

かにかくにつまづくまいぞ冬椿
天界を祓ひてをりし菊の花
山眠る神話の星の語りだす
地球といふ星の木の葉の降る音か
墳山つみの上に天狼透き徹る

近藤喜子

初時雨ぱらりと遊びごころほど
荒海のこの匂ひ青鮫のもの
失ひし色恋ふやうに鳴る枯葉
次の世を見てをりぬ冬蝶の夢
落葉して眠りに入りし森の精

瀬川公馨

山茶花の薄紅色のカノンかな
流木と鷺を離さぬ冬の川
無双窓鬼籍に入るや冬の日イ
断舎利の女がゐたり冬の原
蕪むし苾から待ちてゐたりけり

久保東海司

着水の二羽は雌雄のかいつぶり
鳩の湖末広がり投網打つ
煌々と流燈百が堰を落つ
壁占めて競ふ魚拓や鯛の秋
芋を煮てほころぶ顔の鍋奉行

柳川 晋

冬帝来白か黒かを決めに来る
出雲など寄つたことなし神の旅
文明の真ン真ン中の大氷柱
兎狩天下は弓矢にて奪ふ
見たこともなき小鳥来る時ときよ世かな

熊川暁子

秋日濃く水に浮くもの皆眩し
妻乗せて夕日を帰る稲車
伊邪那美命いつぶく里神楽
小鳥来て風のやはらぐ刑場跡
吊し柿皆こちら向き日を食らふ

寺田すず江

抽斗のどれも空つぽ海鼠囃む
朴落葉こころ許なく裏返る
牡蠣殻の山聳えたつ夕陽かな
達磨忌や変哲もなく暮れてゆく
冬北斗言葉の力信じます

岩下芳子

予防注射しなくても良し玉子酒
比叡山や淡海を跨ぐ冬の虹
刻刻と鴨越の紅葉散る
人肌と言ふと言へども熱燗で
短日の眼重たくなりにつけり

近藤紀子

考よ妣よいただきまする零余子飯
木犀の散りし花の上また花が
金風の吉野に虎となりし皇子
十六才太子のみづらに素風かな
月明の世尊寺礎石ひそとあり

岩月優美子

朴落葉我が身を離れ去りしもの
恐竜の骨探すかに蓮根掘り
ひつそりと古き教会冬紅葉
枯葉一枚しがみつきたる気魂
狐火の一揺れ指針狂ひ出す

竹中一花

寫楽絵のジーンズ街を闊歩せり
勸進の阿闍梨や街に比叡風
隼の動かざる目の空を射る
十夜鉦こくりこくりと婆の息
夜を運ぶ狸来てをり観音堂

前田美恵子

極楽は夢想の中よ十夜鉦
慎ましく古希を過ぐるや青木の実
身じろがぬ隼の目の気魂かな
大山にかかると彩雲神集ふ
こがらしに誘はれて入る赤提灯

中田禎子

着ぶくれてチャイナタウンの西施かな
宿題をたんと残して熊穴へ
杣道や狸のこゑを聞きもらす
蒼天に命のあかし木守神
寒月や一人芝居の影躍る



槐市集

有松洋子

測量士寒き道路に声をかく
ラガーいま五体投地のごと倒る
「次は冬、冬です」と車掌降りねば
言葉おそろし人が人を踏む凍
体育はいつも見学冬木の芽

犬塚芳子

鳥の群れ秋空遙か雲となる
黄昏れて尚降りやまず冬の雨
長月の風さわさわと一と日暮る
プランターに冬菜を蒔いて何思う
落葉皆何が遠慮で伏せてゐる

井上静子

道づれの人と行きけり紅葉狩
ポリバケツに雨水たまりし神在月
桜もみぢ医師と患者の握手かな
自転車の七路七坂紅葉道
柿熟るる里の山道夕日濃し

今井充子

掃き清む木の実いつばい今朝の冬
仰向けば雑穀ざこく機きあとの秋の雲
銜して叫んでみたし冬の空
菊活けて遺影に語る四方山よ
立冬やバスケの技を逝きて知る



岩田洋子

地下足袋の似合ふ少年松手入れ
うつむきてなんばんぎせる人を恋ふ
椎の実を煎る少年のピアスかな
恋歌を歌ふ傘寿や冬薔薇
父の骨真白なりしか山眠る

植木戴子

寒風や松葉杖つく男の子
洗ひをるはつか大根の凹みかな
冬晴や書舗の北向く九段坂
石の橋松の大樹に冬日かな
寒晴の槐の光浴びてをる

江島照美

今生のここが居場所よ神の留守
おさがりの袴引き摺る七五三
大枚をはたき頂く千歳飴
親子心の齟齬七五三
茶の花や卒寿の父と歩む道

岡田桃子

御開扉や紅葉越しなる大悲閣
那谷寺の自然じねんち智ち落葉明かりかな
護摩堂や四面の獅子と舞ふ紅葉
狛犬の吽像秋の日惜しみをり
卒寿祝ふ赤い椿の飯茶碗

荻布貢

トランプの神経衰弱冬の陣
大橋も茜に染まるかいつぶり
半島の波逆巻くや鱒起し
冬晴や銀嶺立山迫りくる
辛口の地酒に集ふ神無月

久保夢女

思ひ出し笑ひを案山子見咎める
秋闌けて海キラキラと夢未だ
寄り添ふて秋の日和を分かちをり
苦も楽も波がさらひて秋ふかむ
ヒロインは望む術なし花ひらぎ

槐集

高橋将夫選

立冬の波平らなりわが魂も 岡崎 吉田 順子

混沌の現世にひよいと冬木の芽

浮寝鳥生死を悟りゐる如く

白鳥の啼く声星を殖やしけり

風花の吹き戻されて宙に消ゆ

天網のほころびあまた山眠る 大阪 藤田美耶子

水澄みて心の綾の映りけり

月の土地売られ驚く兎かな

丹頂のつがひは白き息交はず

曜変天目銀河の雫とどめけり

静寂に静かさ加ふ石露の花 江島 照美

衣衣の別れとなりぬ暖鳥

色鳥の中にいるわよ青い鳥

人の道馳の道も確とあり

執着はなくて幸せ木の葉髪

こんな暗きに石露すこやかに咲きにけり 大阪 洋子

黙といふ充足ふたりに暖炉燃ゆ

冬桜散りて筏とならぬ嵩

神の旅提げるは里の芋焼酎

狼となるまで髪を逆立てる

冬の蜂天帝の手の内にあり 岡崎 柴田 靖子

海にむかひ素直になりし冬の虹

演技して万物生きし冬ざるる

神やどるや寒九の水に満たさるる

枯木道に繋ぐ手のあり明かりさす

紅葉に染まりて拜む青不動 枚方 中 貞子

鬼柚子を飾るや部屋に威厳ある

もみぢ寺の梵鐘一打吾ここに

裸木となるや新芽の息づかひ

九体寺に彼岸の紅葉明かりかな

銀河往来 ◆槐集観照

高橋将夫

混沌の現世にひよいと冬木の芽 吉田 順子

いつの時代も世の中は混沌としている。しかし冬の時代であつても新芽が顔を覗かせる。「ひよいと」が心を和ませる。

〈立冬の波平らなりわが魂も〉の句と〈浮寝鳥生死を悟りある如く〉には達観がある。〈白鳥の啼く声星を殖やしけり〉の句にはロマンがある。〈風花の吹き戻されて宙に消ゆ〉の句には詩情がある。

水澄みて心の綾の映りけり 藤田美耶子

秋の水は心の綾まで映すほど澄みわたっているのだ。

〈天網のほころびあまた山眠る〉の句、天網の綻びをを前にして、山は眠るしかないのだ。まさしく精神の風景。

〈月の土地売られ驚く兔かな〉の句、決して笑いごとではないかもしれない。

〈丹頂のつがひは白き息交はず〉の句は愛情で満たされており、〈曜菱天目銀河の雫とどめけり〉は詩情があふれている。

静寂に静かさ加ふ石露の花 江島 照美

石露の花が咲いて、ただでさえ静かな庭が一層静かに感じられたという繊細な感性の一句。

〈色鳥の中にいるわよ青い鳥〉の句は季語の「色鳥」とメルヘンの「青い鳥」の取り合わせがユーモラス。〈衣衣の別れとなりぬ暖鳥〉はなかなか意味深長。

冬桜散りて筏とならぬ高 有松 洋子

川に散っても花筏とならないほどしか咲いていない冬桜、それだけに、一片ひとひらがいと美しい。

〈黙といふ充足ふたりに暖炉燃ゆ〉の句、黙って居るだけで幸せという二人の関係がほほえましい。〈神の旅提げるは里の芋焼酎〉はユーモラス。

海にむかひ素直になりし冬の虹 柴田 靖子
「海に向かうと素直になる」とは、作者自身の素直な気持なのだろう。

〈演技して万物生きし冬ざるる〉の句、人生劇場というが、万物にとつてこの世は台本のないドラマ。〈冬の蜂天帝の手の内にあり〉、全ては天帝の手の内。冬蜂とて例外ではない。

もみぢ寺の梵鐘一打吾ここに 中 貞子
美しい紅葉の寺の梵鐘の一打。それより、私がかここに居ると自体が大事なのだ。

〈裸木となるや新芽の息づかひ〉には新芽に注ぐやさしい眼差しがある。

迷ひ込む鏡の中に冬紅葉 三木 亨

鏡の中の異次元を描く精神の風景。どんな冬紅葉の世界か。はたして戻ってこられるのだろうか。

〈水涸れの小便僧恥づかしげ〉の句、「水涸れ」の季語で小便僧もきつちり俳句になった。〈以下略〉